



羅針盤

伊崎 誠一
Seiichi Izaki

埼玉医科大学総合医療センター皮膚科 教授



感染性肉芽腫と非感染性肉芽腫を結ぶもの

皮膚科学の分野で多くの Expert の古くからの語り伝えがある。分からない・難しい皮膚病を見たら、「結核、ハンセン病、梅毒」を忘れるべからず。このような格言を補うものとしてわが恩師の Expert は、『現代医学では、「サルコイドーシス、リンパ腫、転移性皮膚癌」を加えるべき。いや、さらに「AIDS の皮膚病変」も加えるべき』と語っていた。今回この特集号にその全 7 疾患のうち 4 疾患がはいってきたのは偶然であろうか？

EBM 全盛の時代に Experts said の格言のごときは重要視されないのかもしれない。しかしながら、多くの肉芽腫性疾患は稀少で診断も治療も困難だが、忘れてはならない疾患である。これらを適切に診断・治療してこそ専門家というべきではなかろうか。

さて、難解な肉芽腫性疾患を集めて特集号を組んで、そこから何を教訓として得るか、何を理論化し、そして体系化するか、本特集号編集担当委員に与えられた大きな課題である。

本特集号の Part 1. 「感染性肉芽腫」で取り上げた疾患は、抗酸菌感染症、真菌症、寄生虫症など、それぞれがひとつの章で語られるべき独立した内容を持つ。病原体、生体反応、免疫、診断、治療、いずれもそれぞれに内容ある課題である。これらを敢えて肉芽腫性炎症の視線か

ら取り上げると、いかなる見え方になるであろうか？そしてその理解を得て、Part 2. 「非感染性肉芽腫」を鳥瞰すると、またなにが見えるか？それが本特集号の企画である。

世にテキストの類は多数ある。いろいろな観点から書かれた教科書において、そこでの目次編纂すなわち編集者による疾患分類は時代の影響下にあり、また同時に編集者の主観・主張に従う。肉芽腫性疾患は原因となる微生物や異物を主に語る時には、それぞれの単元で別々に取り扱われるのが常である。ここでは原因による分類をせず、生体反応、組織反応の様式から疾患を集めている。このような視線は織物の縦糸に対する横糸の如くであり、複雑な現象の多面的理解にとって必要な作業なのである。

原稿を依頼し、協力して下さった方々はそれぞれこのような貴重な疾患を地道に研究しておられる、筆者が日頃尊敬する専門家の先生方である。目次を見て頂くだけである程度のストーリーを頭に描いて頂けるようであれば、本特集号は半ば成功。一読後、底流として流れている未完成の理論をひとつの主張として感得して頂ければ、望外の幸せというものである。